史料室だより No. 12　東洋英和女学院史料室委員会
発　行　1981年7月14日

特集　明治期の学園生活　Ⅱ

林　つる様の話

私の寄宿舎生活は大江スミ先生のお部屋で、大江先生から先ず第一に「祈ること」を教えられたことから始まります。けれども私は、入った当座は淋しくて、早く家へ帰れますようにと祈ってばかりいました。

私は一人っ子でした。父と早く別れましたので母は何とかして人様に笑われないように育てようと思ったのでしょう。東洋英和を選んだのもその為でした。私は麻布谷町に住んでいましたから、学校とは近かったのですが、当時は全員が寄宿に入るという事で、通学生はいませんでした。入学の時は母ではなく、誰か知らない男の人に連れていかれました。

寄宿の生活に慣れてきますと、寄宿が良くなって、学校から家に帰りたくなくなりました。私は明治31年に11才で入学し、39年の卒業まで8年間東洋英和で勉強しました。予科から本科への試験が出来なくて、下の組になってしまいました。けれども、それが幸いして、日本学と英学が一緒に勉強出来ました。

永坂14番地に入ったのは3月でした。校舎新築のため、その年の夏休みに校舎をとり壊し、下級生は永坂幼稚園の2階の畳敷の広間で勉強いたしました。上級生は三軒家に借りた家で、完成までの1年間勉強いたしました。

寄宿では、西洋の先生方と私達の食事は別々でした。西洋の先生はパーラーで、コックが給仕していました。別棟にコックの家族が住んでいて、春さんという娘さんがいました。パンを焼く匂いがしました。又、西洋の先生がピクルスを煮て、その匂いが寄宿舎にたち込めると、私達は「くさい！くさい！」と言っていました。先生方のベッド・メーキングは先生が指名なさった人が行ってやりました。

学校には、校費生という人達が居て、学校で着せてもらい、お小遣いも頂きました。校費生というのは、貧しい家庭の人や、捨子を拾って入れてあげる制度でした。伝道師が連れて来た時は、着のみ着のままの人もおりました。

ミス・ブラックモアにはオフィスに立たされたことがありました。その朝のお話で、部屋の中から外にいる人と話をするのは下品なことだからしてはいけない、とおっしゃったのに、私はその日にしてしまいました。黙って私の衿首を持って、ツゥーッと引っぱって行かれました。寄宿の先生方が集って、ミス・ブラックモアに許して下さるようお願いして下さいましたが、なかなか許して下さいませんでした。その頃は成績の他に、行状点（素行点）というのがつけられました。一番最後に、先生方全体でおつけになったようです。加

茂先生は、こんな私を「あたしゃさ、100点の子より95点の子の方がかわいいよ。」とか、「あたしゃ、江戸っ子が好きさ。」と言ってかわいがって下さいました。悪い事をした時は、「私はもう…をいたしませんというのを100回書かされました。その時は、私・私・私…は・は・は…というように書いても時間が足りません、王女会の下にあった少女会がよく下うけをして書きました。その時は、お礼に2銭くださいました。

〃English Speaking Day〃というのが週一回金曜日にあって、この時は先生にどこでお会いしても、英語で話さなければなりませんでした。私など廊下で先生に出くわしそうになると、早目に曲って逃げましたが、反対側の階段でちゃんと待っていらっしゃって、逃げられませんでした。

寮からの帰宅は、第一、第三金曜日の夕方から土曜日の夕方まで許されました。外出日以外は、四大節の休みでも家に帰れません。外出日に帰らない時は、3銭以内のお菓子を買うことが出来ました。風呂敷の中に、お芋1銭、おせんべい2銭と書いた紙に包んだお金を入れて、小使いさんの部屋に持って行き、買ってきてもらいました。通学生の控所に、週2回文房具を売りに来ました。

寄宿生が全員寝かされたことがありました。私が上級生になってからでした。麻布教会に偉い先生がいらしてお話をなさいました。そのお話の中で、何度も特徴あるお言葉が出て来ました。私が小さな声でその真似をしました。すると、おかしさをこらえていた全員が、くすくす笑い出してしまいました。ミス・ブラックモアは、偉い方に対して申し訳なく、大層恥をかいたとお怒りになり、〃Go to bed〃とお命じになりました。このお仕置は、身動き一つしてはいけなくて、仰向けになり、眼をつむっているという苦痛なものでした。

寄宿の部屋は一室4人でした。上級生・下級生の学年の違う人達と先生が一人づついらっしゃいました。ですから、部屋に名前はなく、何々先生のお部屋と呼んでいました。上級生は下の子のお下げ髪を結いました。自分の櫛を使って、結ってあげます。15・6才になるとマーガレットという髪を結い、リボンをつけました。リボンは当時唐物屋といって、銀座のサエグサ、麹町の八木屋に買いに行きました。卒業式には白いリボンをつけました。卒業式の着物は一時派手になって、お振袖や紋付になりました。校費生は木綿の振袖でしたが、派手になり過ぎたので改められ、私の卒業式は縞でした。

ミス・ブラックモア

寄宿のお部屋には電気がありませんでした。廊下に3ケ所位ついていました。勉強が終ってからの日課は、足袋継ぎでしたが、寒い時はスチームに体をくっつけて足袋を継いだものでした。自習時間は夜7時から9時迄で、下級生は7時半に寝かされました。消燈は9時半でした。校舎は1階が教室、2・3階が寄宿舎、4階が物置でした。お手洗は1階の別棟で、夜は真っ暗な渡り廊下を通るのがとても怖かったことが忘れられません。9時半に消燈すると、西洋の先生が各室をおまわりになりました。〃Good night, girls〃とおっしゃると、〃Good night, 先生〃と言い、部屋の人数を報告しました。

毎日の生活はきちんと時間がきめられていました。ですから、試験の勉強がしたい時などは、朝

早く起きることが出来ませんので、寝床の中でそっと着物をきて、七時になったらパッととび起きてその時間に勉強したりもしました。

お風呂は週2回乃至3回位、3時から15分おきに交替で入りました。なおさんという小使いさんが湧かしたようです。西洋の先生はあまりお風呂はお入りになりませんでした。バケツにお湯を入れ、部屋で体を拭かれたようです。夜はお部屋に便器がくばられていました。

賄人は5人位いました。食事は精進揚がおいしかったのですが、白味噌汁に牛肉が浮いたものは、食べられませんでした。食堂は椅子とテーブルで先生もご一緒に8人で1テーブルでした。私はおかずの好き嫌いが多く、「おこうこの下さん」と呼ばれる程で、何も食べられない時は、先生方が御自分の香の物をまわして下さったものでいただきました。

加　茂　先　生

授業は、午前は日本学、午後が英学でした。時間割は、朝6時起床、7時食事、8時から15分間礼拝がありました。12時から昼食、午後は1時から3時まで3科目ありました。午前の日本学は、裁縫は加茂先生、絵は菊地先生で、習字は週一回宮里先生に放課後お習いしました。卒業の時には三十一文字の和歌を詠み、奉書に書きました。絵は絹を張って木蓮などを書き、やはり卒業の時に展示しました。地理・歴史は丸暗記させられました。朝一旦寄宿を出たら、忘れ物があっても上へあがることは許されなかったので、柳行李にお道具や教科書を全部入れて教室へ行ったものです。

午後の授業は全部英語でした。地理は外国地理で、「ボストンについて書け」というような問題にも英語で答えました。歴史は英国史でした。体操は特別時間でクラブを持ってやりました。卒業式には来賓の前で、たすきをかけ、草履をはいてやりました。

卒業証書は英学、日本学が一枚の紙で、英学何年、日本学何年と書かれていました。全員の前で点数、席次が読みあげられました。

礼拝は通学生と一緒に朝8時から15分間行われました。教室の間の戸を開けて、広い一部屋にし、終ると閉めて各教室にするというものでした。礼拝の司会はミス・ブラックモアで、オルガンは今諏訪先生、通訳の先生はミス・ブラックモアの指名でその都度代りました。日曜日は静かに過すように「お静か時間」がありました。クリスマスは冬休み中で、家に帰っていて、学校としてはありませんでしたが、聖歌隊のために、クリスマス礼拝には帰って来ました。聖書は、修身の時間に教えていただきました。

遊びというのはお手玉位でした。西洋の先生はテニスをなさいました。芝公園の薔薇がきれいな時は散歩に行きましたが、普段は学校の中から外へ出ることはありませんでした。舎監の加茂先生が、時々買物のお伴に連れて行って下さいました。

お友達は川口さん、高木勝代さんでした。外出日に外出しない時は、お友達の部屋に行っても良かったので、お友達の部屋で過しました。寄宿生だけで時々文学会をしました。大文学会の時には、通学生も一緒で、お客様を招待しました。「曽我五郎、十郎」を演ったりもしました。

先生で印象に残っている方は、ミス・ロバートソンです。大きくて、やさしい方でした。英詩の

暗誦をみていただきました。卒業式には、一番の生徒が英詩を暗誦します。今でもロングフェローの詩など暗誦することができます。他に英訳の小林富子先生は男性的な方で、音楽の今諏訪先生は、女らしい方でした。

大堀しげ様の話

明治41年頃の学校は、小学5年生以上で、部屋が空いて居りましたら、何時でも受け入れて下さいました。河上末子さんの3階のお部屋が一人分空いていたので、私はそこに入りました。平岩さん、豊田ハマさん、大倉ミヨ子さんと御一緒でした。やさしい編入試験を受けました。父の勤め先が佐賀県の山本でしたので、家族は全員向うに居りました。ちょうど試験の頃に母が亡くなりましたが、両親は私を東洋英和か青山女学院に入れることに決めておりました。東洋英和は礼拝をきちんとなさるし、西洋の先生方もいらっしゃるし、規則のきびしい所にお世話になろう、どっちみち女学校になったら東京で教育を受けさせたい、と思って決めていたそうでございます。青山女学院の方は女学部にならないと寄宿に入れて頂けないので、こちらの希望に叶うという事で東洋英和に決めました。明治41年12月1日のことでした。

昔は毎週聖書の句を英語と日本語で朝の礼拝の時に暗誦させられ、一週間で覚えるように言われました。講堂にエレミヤ記38章20節の「エホバの声に聞き従い給え、さらば汝幸いを得ん、汝のいのち生きん。」というのが掲げられていました。英語の「エホバ」の所に一本線が引いてありましたのを今でも覚えています。

校長先生はミス・ブラックモアで、肥った大きな立派な先生でした。小沢ふさ子先生が通訳をなさって下さいました。講堂に椅子がいっぱい置かれ、お教室が二つあり、事務所の裏の方に5年生

前列中央　大堀先生

の部屋があり、私は6年生でしたからその並びの教室でした。

そのうち父が満鉄に転勤になり、大連から小沢先生に、食費やお月謝をお送りしておりました。お小遣いが50銭、学内に文房具を売る所がありまして一販売具と申しましたが一帳面、鉛筆、半紙等を買いました。5厘ちがってもお小遣いを下さらないんです。「お釣りを違ってもらったのかもしれない。おしげさんは私が預かっているのだから、すべてのことをだらしなくしてはいけない。」と言われ、よく考えてお小遣いをつけました。

私は大正3年3月に5年生を卒業しました。両親は帰って来いと申しましたが、帰りたくありません。裁縫が出来ないといけないと思い、立派な舎監の加茂先生とお妹さんの松野先生に、袴、男物の羽織、単衣から袷までお習いしました。お裁縫は午前でしたが、英語は午後で、たしか1時から30分間は聖書の勉強でした。その後英語で、詩の暗誦とかをしました。ミス・ブラックモアのお作りになった寄宿舎の生活がずっと書いてある詩などを暗誦しました。

私は、ほんとうは幼稚園の先生になりたかったのですが、両親からとめられました。それは、当時幼稚園が上田にあったからで、小沢先生のお手許から離れるのは賛成出来ないという理由でした。私は大連に行くのが嫌でしたから、何とかしてと

思う時にミス・ハミルトンがお呼びになり、まだ続けて勉強して、もし小学部の先生になりたいなら、ここで一年勉強しなさいと言って下さいました。昔は文部省認定となっていなかったのです。

昔は運動会はありませんでした。運動会のことはあまり覚えておりません。雨天体操場があって下は板張り、２階は畳でした。西洋の先生が英語で体操を教えて下さいました。〃Hands Up.!〃とおっしゃると皆手を上げます。〃Hands down, down, down……〃しまいに〃Lie down.!〃とおっしゃいます。寝てもいいのですから寝てしまいました。〃Get up.!〃とおっしゃっても気持ちがいいから起きゃしませんでした。そうやって先生を困らせたりして……。雨天体操場というといつもこのことを思い出します。体操の他には、何というものでしたか、長いもので手に持って、〃One, two, three, four, two, two, three, four……とやりました。又、それより少し短いものを持って、お天気の日には上の運動場と言いまして、山尾子爵のお庭で体操をしました。

「手にて有用なる技工を練り頭に明瞭なる思考力を養い兼て克己の精神を修養するにあり」

明治４０年改正　教科課程Ⅰ

表覧一程課科學科稚幼

學科／學年	修身	國語	算術	圖畫	裁縫	手工		唱歌	體操
毎週時數	二	一〇	四						
第一學年	要旨口授	話綴書讀發シリキミ方方方音	二十以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル數ヘ方書キ方及加減乘除			簡易ナル細工		各學年毎週二時間	各學年を通し適宜に之を課す
毎週時數	二	一二	五	一					
第二學年	同上	話綴書讀シリキミ方方方	百以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル數ヘ方書キ方及加減乘除	単形		同上			
毎週時數	二	一二	五	一	二				
第三學年	同上	同上	通常ノ加減乘除（珠算）加減	簡易ナル形体	運針法	同上			
毎週時數	二	一二	五	一	二				
第四學年	同上	同上	通常ノ加減乘除及小數ノ數ヘ方書キ方及加減（珠算）加減乘	同上	運針法及通常衣服縫方及初歩	同上			

明治４１年３月卒業生
（１９０８年　２１回生）

西洋人の教師による料理の時間

前列坐っている２人の左
松井良（桃井）
西洋人の左隣　植村清（臼井）
西洋人の右隣　酒井廣（大貫）
右端から２人目（顔だけ出している）　比屋根雪（北村）

写真提供者
比屋根雪（北村）の遺族

明治40年改正　　教科課程Ⅱ

豫科					本科				
	一週時數	第一年級	一週時數	第二年級	一週時數	第一年級	一週時數	第二年級	一週時數
倫理	2.5	道德ノ要旨 口授	2.5	同　左	2.5	同　左	2.5	同　左	2.5
國語	5	講讀 書取 作文	4	同　左 同　左 同　左	4	同　左 同　左 同　左	4	同　左 同　左 同　左	4
漢文									
英語	5	讀方 書取 會話 習字	5	讀方 書取 譯解 會話 習字	6	讀方 書取 譯解 會話 習字	7	讀方 書取 譯解 會話 習字 作文典	7
地理	2	本邦地理	2	同　左	2	外國地理			
歷史			2	本邦歷史	1	同　左	2	本邦歷史	2
數學	4	筆算四則應用 等數 珠算 加減	3	同　左 小數 分數	2	同　左 整數 小數 分數等數	2	同　左 分數比例	2
理科	2	博物大意	2	同　左	2	植物　動物	2	生理 衛生	2
教育									
心理									
生理									
習字	2	楷書 草書假字交	2	行書 同　左	2	草書 同　左	2	諸体細書	2
圖畫	1	鉛筆畫	1	毛筆畫	1	同　左	1	同　左	1
家事									
裁縫	2	縫方	2	同　左	3	縫方 裁方	3	同　左 同　左	3
唱歌	各級2時間半								
体操	各級2時間								
禮法	各級ヲ通ジ適宜之ヲ課ス								
手藝	各級ヲ通ジ適宜之ヲ課ス								

一、寄宿生ニハ課業ノ餘暇家事ニ習熟セシメン爲割烹及ビ室内洒掃ノ業ヲ操ラシム

科						高等科			
第三年級	一週時數	第四年級	一週時數	第五年級	一週時數	第一年級	一週時數	第二年級	
同左	2.5	同左	2.5	同左	2.5	同左	2.5	同左	
同左 同左	4	同左 同左	5	同左 同左	5	同左 詠歌 同左	5	同左 同左 同左	
					3	講讀	3	同左	
讀方 書解 譯取 會話 習字 作文典	7	讀方 譯解 文典 作文 歷史 地理 文學	7	讀方 譯解 文典 作文 歷史 地理 文學	8	譯解 文學 修學 辭典 歷史	9	譯解 文學 修學 辭 歷史 キリスト 證據論	
			2	地文學					
東洋歷史	2	西洋歷史							
同左 比例 利息 求積	2	代數	2	幾何	2	同左 同左			
物理	2	鑛物 化學			2	植物 動物	4	物理 化學	
					2	教育	3	同左 教授法	
			1	心理學					
					1	生理			
草書 假字	1	同左 細書	1	楷書 諸体速寫					
同左	1	同左	1	同左					
	2	家政 簿記	2	西洋料理 看護 育兒					
同左 同左	3	同左 同左 繕方	3	同左 同左 同左					

明治四十年改正
東洋英和女学校規則

第八節　生徒心得

第卅三条　課業ハ午前第八時ニ始マリ午後第三時ニ終ル

第卅四条　日曜日ハ午前九時ヨリ基督教ノ要旨ヲ教授シ同十時ヨリ麻布教会堂ニ於テ説教ヲ聽聞セシム

第卅六条　生徒ハ誠敬自勉メ忠恕人ヲ待テ貞静温雅ノ徳ヲ養フベシ

第卅七条　課業ニ精通熟達シ之ヲ日常ニ施シ事ニ臨ミテ迂濶怠慢ナルベカラズ

第卅八条　生徒ハ常ニ袴ヲ用イ服飾等ハ質素ヲ旨トシ浮華ニ流ルベカラズ

第卅九条　風俗ヲ害スベキ図書玩具ノ類ヲ携帯スベカラズ

第四十条　相互ニ金銭物品ノ貸借ヲナスベカラズ

第四十一条　通学生ハ寄宿舎ニ立入リ又ハ寄宿生ノ為ニ物品書状等ノ取次ヲナスベカラズ

第四十二条　寄宿生ハ以上ノ外ニ寄宿舎規定ヲ遵守スベシ

第九節　寄宿舎規定

一、寄宿舎に在るものは左に掲ぐる時刻を確守すべし

晨起　午前六時

就寝　午後九時

但年令十二年以下のものは午後八時就

喫飯　午前七時　正午十二時十分

午後五時半

運動　午後三時ヨリ五時半マデ

但右時間中は決して勉強すべからず

自修　午後七時ヨリ同九時マデ

一、室内其他廊下等に於て高談疾走し或は高声にて読書等をなすべからず、又就寝時間より翌晨起の時間までは疾病又は格別の理由ある外は如何なる談話読書勉強其他一切の業務をもなすべからず

一、入浴及衣服の洗濯等は舎監の指揮に従ふべし

一、舎監の許を受けずして飲食物を携ふることを禁ず

一、校長の許可なくして課業時間に出入すること及舎内に来訪者を誘引することを禁ず

一、左に携ぐる時日の外は来訪者に面会することを許さず

土曜日　　終日

日曜日を除き毎日午後四時より同五時半迄

一、父母の外は保證人の證人の證書を持参せざる者に面会することを許さず

一、帰省は毎月第一及第三の金曜日午後四時より帰舎は翌日午後五時半迄とす

但保證人より帰省の請求なきときは之を許さず

一、校長の許を得ずして猥に外出することを禁ず

一、校長或は舎監の手を経ざる信書其他一切の郵便物を猥りに受け或は発する事を堅く禁ず又寄宿生宛の信書にして不審と認むるものあるときは校長の面前にて開封せしめ事柄に依りては適宜の処分をなすことあるべし

一、錠前の備へ付けある器具の外金銭を入れ置くべからず

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

お願い　委員会では資料集として宣教師の先生方の私信を集めて居ります。コピーをとらせていたゞける方はぜひ御協力下さい。委員会まで御連絡下さい。

あとがき　林つる様は現在茅ヶ崎にお住いです。今もお元気で、昔の生活を2時間休みなくお話し下さいました。大堀先生のお話は、昨年の追悼会の折テープにとらせていただいたものです。

（中高部、中野、沓沢、朽木）